

摩訶衍

(大正十四年七月十五日發行)

『法然聖人繪に就て』

江 藤 澂 英

◇緒 言

我祖法然上人は實に千古の大德萬代の師範として一代行化の芳躅は、燦として衆人鑽仰の龜鑑であるが、宜なるかな其傳記の衆多廣汎なることは、古今東西に殆んどその類例を見ざる所である。上人一期の行狀を別傳として編輯せるものは醍醐本法然上人傳記を始め、凡そ十數部一百餘卷を數へ、單に行狀の一部を録せるものに至つては、三昧發得記以下百十餘書の多きに達する。更に文字のみならずして繪畫としても、古くは耽空の本朝祖師傳記繪詞四卷、増上寺藏の國寶本殘缺二卷、常福寺藏の國寶拾遺古德傳九卷を始め、或は越後西脇家、東京德川達孝伯爵家、神戸川崎男爵家等の各繪卷殘缺、知恩院藏の七幅繪傳より、最も先輝ある由緒、詳悉なる記事、婉雅なる畫圖を以て有名なる知恩院、

並びに當麻往生院藏の各國寶法然上人行狀繪圖四十八卷等これまた二十餘種を算することが出来る。

かくの如きは上人の徳化が如何に絶倫であるかを物語る一證左であるが、しかも今圖らず新たに上人傳中に、法然聖人繪なる史料一卷を加へ得たことは、聊か吾人の誇りとすると共に欣喜に堪えざる所である。

◇本繪卷の由來

法然聖人繪一卷は本春二月中旬知人なる大津市甲良徳雄氏が、偶然余が許に持參されしものにて余は一見して稀有の逸品なるに驚くと共に、そが出所並に傳來に就て調査を試みたのであるが、詳細に之を知るを得ざりしも滋賀縣今津町眞宗大谷派法慶寺に傳りしものにて、更にその源流を尋ねれば越後方面より將來されしと傳へ、十數年來數奇なる經路を流轉し來つたものであるといふ。而して今偶然なる機縁に依つて余か手に入りしかば、余は直ちに藤堂祐範氏に計り祖山の什寶となすべく狂奔し知恩院當局者とも協議の結果、遂に京都西園寺住職大野誓貫氏の盡力を煩し同寺檀徒谷川茂次郎氏が巨金を投じて購入の上祖山へ寄附されるに至つたのである。かくて祖山の有に歸すると共に宗寶に撰定せられ近く國寶にも編入せらるゝならんと云はれてゐる。而して本繪卷に就ては當時(大正十四年三月下旬)同學井川定慶君が該博なる研究を、中外日報紙上に發表されたから既に周知のことであらうと思ふ。故に余は今茲にはたゞ其概略を述ぶるに止め、詞書のみは煩をいとせず全部原本の儘之を掲出し以て諸

賢の研究資料に供することにする。

◇本繪卷の形式

本繪卷は豎一尺三寸七分、横約四尺あり、詞書畫圖各十三段から成り、扉の裝幀は表裏共に高雅な墨流しの模様である。文字は上品な青蓮院流で紙質墨色等から照合しても一見鎌倉時代の作物の感じがあり、繪は土佐風で頗る古雅淳朴である。詞はすべて繪の上に懸り繪の部分が少し除けて字が書れてゐるが、この點から考へれば繪は書よりも前に出來たらしくも思はれる。殊に本繪卷に於て特異なる點とも見られるのは、詞書と繪圖が同一料紙に載せられてある部分が多く、しかも書と繪との間には墨色の薄い細線を以て、區劃がつけられてゐる如き他に類例の少いことであり又波頭に胡粉を筆端で挑ねて白馬をあらはしてゐる手法なども珍らしいのである。

内題は「法然聖人繪」と書し、奥題には「黒谷上人繪」として、其下に「釋弘願」と記し何れも同一筆である。

◇本繪卷の内容

本繪卷の内容は左の通りである。たゞ今は繪圖の部分のみは私に標題をつけ、枠に圍んで之を示すことにし。詞書はすべて原本のまゝとした。

法然聖人繪

元久二年四月五日九條殿にまゐりて退出の時頭光を現し蓮花をふみてはるかに地をはなれて拜し給へりさて人々にかゝることありつ各々かたみつるかと仰ありければ隆信入道戒心房中納言阿闍梨尋玄をかまざるよし申けりこれよりいよ／＼御歸依はなはたしかりける

九條殿退出の砌頭光踏蓮奇瑞の圖

元久三年の七月に吉水をいて、小松殿におはしましける時

小松とはたれかいひけむおほつかな

雲をさゝふるたか松の木を

權律師隆寛小松殿へまいられたりけるに御堂のうしろとにて聖人一卷の書を持て隆寛のふところにおしけれ給月輪殿の仰によりて造給へる選擇集これなり

小松殿にて隆寛に選擇集付屬の圖

右の御目より光をはなち又口よりひかりまし／＼たり

上人右の御目より放光の圖

又高昌の少將見參の時丈六の面像現し給けり

高昌少將見參の砌丈六の面像現るの圖

上西門の女院にて上人七日の觀戒ありけるにからかまの上に一の蛇あり夏のことなればおとろかすといへとも日ことにかくることなくしてわかたまりをりてすこふる聽聞の氣色見へければ人々目もあやに見ける第七日の結願にあたりて此くちなは唐垣の上にて座りて死する程に其頭二にわれて中より蝶の様なる物いつと見る人もあり又頭はりわれたりと見る人もありけり又天人のほると見る人もありけり昔遠行する聖り其日くれにければ野中に塚穴のありけるにとまりて夜終無量義經をそらに誦する程に彼塚穴の中に五百の蝙蝠ありけり是經を聽聞しつる功德によりてこの蝙蝠五百の天人となりて忉利天に生ぬといへり今一すちの蛇あり七日の觀戒の功力に答て雲を別て上りぬるにやと人々隨喜をなす彼は上代なる上に大國也是は末代にして少國也希代の勝事凡人の所爲にあらすとそ時々の人申ける

上西門の女院説戒の圖

過三女よりおこるといふは本文なり隱岐の法皇御熊野詣のひまに小御所の女房達つれ／＼をなくさめんために聖人の御弟子藏人入道安樂房は日本第一の美僧なりければこれをめしよせて禮讚をさせてそのまされに燈明をけして是をとらへ種々の不思議の事ともありけり法皇御下向の後是をきこしめして

逆鱗の餘に重蓮安樂貳人はやかて死罪に行れけりその餘失なをやまずして上人の上に及て建永二三年月廿七日御年七十九思食よらぬ遠流の事ありけり權者の凡夫に同時如是の事定る習なり唐に一行阿闍梨白樂天我朝に役の行者北野天神おとろくへからすといへとも我等かときは時に當ては難忍類なるへし。

タタ同日大納言律師公全後に嵯峨の正信上人と申き誠に貴き人にて慈覺大師の御袈裟并に天台大乘戒等上人の一の御弟子信空にこれをつたへ給へり同く西國へ流れ給とて御船にのりうつりてなこりをおしみ給けるいと哀にこそ

上人花浴を出て、配所に赴き給ふ圖

攝津國經のしまにとまらせ給ければ村里の男女大小老若まゐりあつまりけり其時念佛のすゝめ彌ひろく上下結縁かすをしらすこの嶋は六波羅の大相國一千部の法花經を石の面にかきて多の上船をたすけ人の類をやすめんためにつきはしめられけり今にいたるまでくたる船にはかならず石をひろひておくならひなり利益まことにかさりなき所なり

上人經ヶ島にて御教化の圖

繙磨の室につき給ければ君達まいりけり昔小松の天皇八人の姫宮を七道につかはして君の名をとらし

め給中に天皇寺の別當僧正行尊拜堂のためにくたられける日江口神崎の君達御船ちかく船をよせける時僧の船に見告やと申ければ神歌をうたひ出し侍りける

有漏地より無漏地へかよふ釋迦たにも

羅護羅か母はありとこそきけ

とうちいたし侍りければさま／＼の纏頭し給ける又同宿の長者老病にせまりて最後の今様になにして我身のおいぬらんおもへはいとこそかなしけれいまは西方極樂の彌陀のちかひをたのむへしとうたひて往生しける所なり上人をおかみたてまつりて縁をむすはんとて雲霞のことくまゐりあつまりける中にけに／＼しけなる修行者問たてまつる至誠心等の三心を具し候へき様をはいかゝ思定め候へきと上人答てのたまはく三心を具することは只別の様なし阿彌陀佛の本願には名號を稱をはかならす來迎せんと仰られたれば決定して引接せられまゐらすべしと深信して心に念し口に稱するにもうからす既に往生したる心地して最後の一念にいたるまでおこたられは自然に三心具足するなり又在家の者共はさ程におもはぬとも念佛申ものは極樂に生るなればとて常に念佛をたに申は三心は具足するなりされはこそいふかひなきものの中にも神妙の往生はすることにてあれ只うら／＼本願をたのみて南無阿彌陀佛とおこたらす唱へきなり

同三月二十六日の讃岐國鹽秋の地頭するかの權の守高階の時遠入道西仁か館に付給さまのきらめきにて美膳をたてまつり湯ひかせなとして心さしいとありかたけり是を御覽して上人の御歌

極樂もかくやあるらんあらたのし

とくまゐらはやな無阿彌陀佛

阿みた佛といふよりほかは攝津國の

なにはの事もあしかりぬへし

又云名利は生死の木繩三途の織細にかゝる稱名は往生の翼九品の蓮臺にのほる

時遠入道西仁問たてまつりて云自力他力のこといかゝ心得へき答云源空は上へまゐるへき器量にてはなけれども上よりめせば二度までまゐりたりきはわかまゐる式にてはなけれども上の御力なりまして阿彌陀佛の御力にて稱名の願に答て來迎させ給はん事をば何の不審かあらん自身をもければ無智なれば佛もいかにしてかすくひ給はんと思はん事はつやつや佛の願をしらざる人也かゝる罪人をやすく〜とたすけん折にをこし給へる本願の名號を唱ながら塵ばかりも疑心あるまじきなり十方衆生の中には有智無智有罪無罪善人惡人持戒破戒男子女人三寶滅盡の後の百歳までの衆生みなこもれり三寶滅盡彼の時の念佛者にくらふれば當時の王入道殿などは佛のことし彼時は人壽十歳とて戒定惠の三學の名をたにもきかすいよはりもなきものとの來迎にあつかるへき道理をしりなからわか身のす

てられぬらまへき様をはいかして安しいたすへき只極樂のねかはしくもなく念佛申されさらん事のみこそ往生のさはりにてはあるへけれかるかゆへに他方の本願とも超世の悲願とも申なり時遠入道いまこそ心得候ぬれとて手合て悦たり

上人時遠入道が館にて饗應をうけ給ふ圖

同行達名に聞へたる所なりいさや讃岐の松山みんと云けるに我もゆかんとて上人もわたり給たりけるに人々面白さにたへすして一首つゝあるへきよしいひければ

いかにしてわれ極樂にむまれまし

みたのちかひのなきよなりせば

人々この御歌落題には松山遠流のけしき候はすと難し申ければさりとては所の面白て心のすめはかくいはるゝなりと仰せられければみなみたととしてけり

上人松山觀櫻の圖

讃岐國小松の庄は弘法大師の建立觀音靈驗の所生福寺に付給仰當國同き大師父のために名をかりて善通寺と云伽藍をはします記文に云是にまいらん人はかならず一佛淨土のともなるへきよし侍りければ

今度のよろこひ是にありとてすなはちまいり給けり

上人 生福寺に参詣の圖

建曆元年八月歸登給へきよし中納言光親卿承てありけるにしばらく勝尾勝如上人の往生の地いみしくをほえて御とうりうありけるに道俗男女まいりあつまりけり

上人 勝尾寺に御逗留の圖

かくて恒例の引聲念佛聽聞のおはりに僧の衣裳こと様なりければ信空上人のもとへこの様を仰られて裝束勸進のよしありければ程なく法服十五具すゝめいたしてもちてまいり給けり感にたえずして住僧等臨時の念佛七日七夜勤修す

勝尾寺にて引聲念佛御勤修の圖

黒谷上人繪

釋 弘 願

◇他傳との關係及對校

前項掲出の如く本繪卷は元久二年法然上人が九條殿に参向して退出の砌、頭光踏蓮の奇瑞を現し給

ふ所より始まり、流罪赦免後勝尾寺に於ける如法念佛會修行に至るまで、上人の一生を八十年として七十三歳より七十六歳に亘る晩年の傳記である。尤も一卷のみでは首尾完結せず殘缺本たることは明かだ、尙この一卷の前後に若干の卷數があることを想像されるが、今本繪傳の真相を確めるために幾多の上人傳中、鎌倉時代より南北朝頃までの他の繪傳に就て對照し見しもその何れとも合致せず、從て吾人の知り得た範圍では本繪卷は從來知れたる何れの傳記にも屬せざる、全く新出の別傳たるを信ずるのである。而して今他傳との二三の對校を左に抄出して見やう。

(イ) 選擇集付屬。本繪卷第二段に於ては隆寛への選擇集付屬は元久三年七月となつてゐる。こは本朝祖師傳記繪詞とは一致する所であるが、四十八卷傳等の元久元年三月十四日とは異なるのである。

(ロ) 上人奇瑞の事。本繪卷第三、四段には上人の右眼放光や、丈六の画像顯現のことを記せるが、これ等奇瑞に關しては尤も年月の記載はなく不明なるも、本繪卷は元久二年の頭光踏蓮の後に記せるが四十八卷傳等には建久九年正月に於ける三昧發得と共に種々奇瑞のことを記してゐる。而して高畠少將見參の時のことは他傳には見えざるが、醍醐本法然上人傳記第六三昧發得記には、「建治二年二月二十一日高畠少將殿於持佛堂謁之其間如例修念佛見阿彌陀佛之後障子徹通佛面而現大如長丈六佛面即忽隱給二十八日午時也」云云とある。

(ハ) 上人の流罪。上人の流罪は念佛宗の別開弘通といふことが、舊宗派の人達から嫉視をうけたのが

重なる因由ではあるが、その近因に就ては諸書其記述振りが一様でない。今本繪卷の第六段によれば上人の弟子達が、小御所に入つて不行跡をなしたことが赤裸々に記してある。こは四十八卷傳等の院の女房達が鹿ヶ谷に出かけて行つた事實とは反し、且つ其書き振りも愚管抄の如く頗る大膽なるは他傳と相違せる所である。また上人が御流罪に際しても別に俗名となつておられず、建永二年二月二十七日とあり、御年は七十九歳と明記してゐる。勿論この九は五の誤寫ならんも或は「齡八旬に近く」とい記録から、かくは記せるに非るかとも思はれる。

(二) 正信の受戒 本繪卷第六段の終に記載せる大納言律師公全、即ち後の嵯峨の正信上人が西國に流罪になつたことは拾遺古德傳等にも出てゐるが、こは明月記嘉祿二年六月十日の條に依れば、松殿の愛妾に關して肥後に配流されたので、念佛興行とは關係なく勿論法然上人配流の隨行者ではなかつたのである。而して今本繪卷は正信が法然上人の一の弟子信空より大乘圓頓戒を受法したとしてゐる。こは四十八卷傳や本朝高僧傳等が法然上人よりの直授とせるに異るが、蓋しこの信空所傳説の方が眞に近いやうである。

(ホ) 拾遺古德傳との比較 本繪卷の大體を拾遺古德傳と比較對照して見れば、勿論全くの寫本にはあらざるもその行文記述は、何れの他傳よりも多くの一致點を見出し得るのである。即ち第九段の驪秋の地頭高階時遠入道西仁(四十八卷傳保遠入道西忍)となれるが如きは兩者全く一致し、また西仁が自

力他方の問答、或は第八段の室に於ける修行者の三心に就ての上人との問答の如きは、從來古德傳のみの説であつて、和語燈錄(十二問答の條)や醍醐本法然上人傳記(十一問答)では、この二問は「遠江國蓮花寺住僧禪勝房參上人奉問種々之事上人一々答之」と禪勝房の問となつてゐるが、今本繪卷は之等と反し古德傳と合してゐる、其他第十段の松山觀櫻を初め諸所に引く詠歌なども古德傳とよく一致しておるのである。然れ共第二段の隆寛權律師への選擇集付屬、第三段の右眼放光、第四段の高島入道の見參、第十一段の小松生福寺參詣等の記事は古德傳に見えず、建曆元年八月流罪を許されたといふ記事以下は年時の記述も相違してゐるから、本繪卷を以て直ちに拾遺古德傳の寫本とはどうしても見得ないのである。

◇筆者弘願に就て

本繪卷の筆者は奥題黒谷上人繪の下に本文と同筆で「釋弘願」と記してゐる。この人名は淨土宗側に傳ふる系譜には見當らぬが、大正十二年東本願寺の發行にかゝる「讚仰帖」なる畫集には、同寺所藏の善如上人筆親鸞聖人傳繪なる寫眞版が収載されてゐる。その第四卷の尾端に「釋弘願」と記してあるが、その筆蹟は正に本繪卷の奥に署名するそれと合致するので同一人なることが肯れる。其解説には「繪詞四卷は紙本着色ニシテ、釋弘願ノ願ニヨリ貞和二年善如上人ノ書寫スル所ナリ、畫者明カナラズ、卷尾ニ「貞和二歲開茂之曆應鐘四日禺中之天聘筆端書功而已、光養九十四歲」ト識シ、第一、二、

四卷ノ尾端ニ「釋弘願」トアリ、光養丸ハ善如上人ノ童名ナリ。本文ハ覺如上人親書ノ康永本ト略同ジ』と書かれてある。然れ共今弘長二年親鸞聖人往生の段の詞書の寫眞と、第四卷の尾端の寫眞とを仔細に對照して檢案すれば、直ちに本文の筆蹟と光養丸の署名とは異筆であることが發見されるのであるが、さりとてまた釋弘願なる筆蹟とも相違してあるから、この解説はこの儘に之を信受することは出來難いのである。

而して藤原猶雪氏は其著「親鸞聖人眞像之研究」(四十九頁)(五十一頁)に於て、この釋弘願の奥書ある親鸞聖人傳繪に關して論じておられるが、氏は是心の二十四輩記の説や鳥栖無量壽寺藏の「港村淨光寺系圖」等に依て、弘願は親鸞聖人の門弟唯佛の孫で淨光寺の第三代法名唯秀のことであり、光養丸とは唯法と稱し弘願の子で淨光寺の四代にして、本願寺第四代の善如上人ではないと述べてある。この考證が果して正當なるや否やは俄かに斷じ難さも、釋弘願が港村淨光寺の第三代唯秀であるといふ説は、本繪卷の筆者を考ふる上に頗る興味ある問題であらうと思ふ。

其他釋弘願なる名は親鸞門下交名帳には二三ヶ所散見するが、果してその何れが本繪卷の筆者に當るかは未だ不明なるも、何れにしても本繪卷の筆者釋弘願は南北朝初期の人であることは信じ得るわけである。

◇本繪卷の完本に就て

本繪卷は前にも一言した如く殘缺本にして其前後に、若干の連れがあつたことは容易に想像し得るのであるが、本繪卷自身に於ても最初余が手許に持來されし際には、諸所糊離れがしてゐて展觀し得ないため態々表具師を招いて繼かしめたやうな次第である。而して第二段の小松殿の繪圖のみは他との調和がとれず、新しい感があるのでこの一段は後世の補圖ではないかといふ疑問がある。其他第六段の詞書の如きも前からの連絡に於て不審がないでもないのである。尙黒川眞頼博士の考古畫譜第二には本繪卷に相當する殘欠三卷のことを載せてある。今これを左に轉載して識者の參考に資することにする。

黒川眞頼全集考古畫譜第二(二二一九頁)

法然上人繪傳 殘缺 三卷

古畫目錄云法然上人繪傳三卷、每卷標題黒谷上人繪傳釋弘願 御家人坊主中村家藏 寛政戊午

觀子屋代弘賢家

眞頼曰 此の繪傳三卷予これを見る、このうち一卷は重複なり、第三の卷尾に記して云はく黒谷上人繪傳第三、釋弘願と篇目あり、其他二卷には篇目なし、又卷尾に記して云はく、右法然上人繪詞卷物、新見氏より借用、高島千春より出で由、繪詞とも著者所傳なし、天保十一庚子年六月上旬模會心齋と見えたり、古畫目錄の説によれば御家人坊主中村某の所藏とおぼゆ。

是に依て考ふれば黒川博士の見られしは天保の寫本でしかも重複があつたやうであるが、それにしても近く三卷を親しく見られたとすれば、其所在を知り得て本繪卷の首尾を究めたものである。

以上は忽々の間に本繪卷の内容を紹介するに併せ愚見の一端を述べた迄で、同學井川定慶君の研究に負ふ所多きを附記しておく。

——大正一三・六・一七高等講習會を了りて——

インターネット公開許諾のない文章には墨消し処理を施しています。